福井県立美術館 2015

美術館だより

MUSEUM NEWS Vol.146

contents

〈展覧会紹介〉
「古代エジプト美術の世界展 ー 魔術と神秘ー」 [2〜3]
〈イベント報告〉
「ゴーギャンとポン＝タヴァンの画家たち
ー フランス・ブルターニュの光 ー」 [4]
米谷清和氏に聞く
「日本画家・横山操とその時代（第一回）」 [5〜7]
それゆけ！ブブ広報部隊 [8]
〈福井県立美術館　次回の企画展案内〉 [8]
〈お知らせ〉美術館喫茶室ニホ・休館日・貸館情報 [8]

表 紙：《マミーボード（ミイラに被せされた木製の蓋）》エジプト第 3 中間期（1080-664 BC）© Fondation Gandur pour l'Art, Geneva, Switzerland. Photographer：Sandra Pointet（ガンドゥール美術財団蔵）

FONDATION GANDUR POUR L'ART

ガンドゥール美術財団の至宝

日本初公開

古代エジプト美術の世界展 魔術と神秘

2015 7.3[金]—8.30[日]

Ancient Egyptian Art & Magic

Treasures from the Fondation Gandur pour l'Art, Geneva, Switzerland

休 館 日／7月21日(火)、8月3日(月)
開館時間／午後9時～午後5時(入館は午後4時30分まで) ※7月3日(金)は午前10時～
観 覧 料／一般 1,400円(団体1,200円)
大・高生 1,000円(団体800円)、中・小生 700円(団体500円)
※団体は20名以上。※学生の方は学生証の提示が必要です。
※障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は半額。

主催／古代エジプト美術の世界展実行委員会(福井県立美術館、福井新聞社、福井テレビ)
後援／スイス大使館、エジプト大使館 文化・教育・科学局、外務省、石川テレビ、富山テレビ
協力／スイス インターナショナル エアラインズ、日本航空、ハーシュ・トランスポート、日本通運、XL保険
監修／ロバート・スティーヴン・ビアンキ　企画協力／アートプランニング レイ

今から5000年以上も昔、アフリカ大陸を流れる大河ナイルの流域に誕生した古代エジプト王朝は、約3000年もの間、神の代理人であるファラオとそれをとりまくごく一部のエリート層の人々によって守られ発展しました。
いかに強大な王権政治であったかは、いまも残る巨大なピラミッドや壮大な神殿からも想像にかたくありません。
古代エジプト人ほど「永遠」という言葉を好んだ民族はいません。彼らがみずからの墓に残した石碑やレリーフ、彫刻、オブジェ、装飾品などには、死してなお、その命が永遠につづくことを渇望する人々の願いが刻まれているのです。
本展は、世界屈指の古代エジプト美術コレクションをもつガンドゥール美術財団の全面協力のもと、石碑やレリーフ、さまざまな副葬品に刻まれたヒエログリフや図象のデザインを読み解き、そこに使われた素材や色から、魔術的な効用や意味を探ることができるように構成されました。
「ヒエログリフの魔術」「素材の魔術」「色の魔術」をキーワードに、古代エジプト美術の魅力的で象徴的な特徴に焦点をあて、その魔術と神秘の扉を開きます。
約150点に及ぶ出品作品はすべて日本初公開です。

〈関連企画〉
見どころ解説会　開催日：7月3日(金)を除く会期中毎日　時間：午前10時30分～約10分間
(無料)　※ただし都合により中止になる場合があります。
音声ガイド／500円

①

②

③

⑤

④

⑥

⑦

①「トキの像」エジプト末期王朝(664-332 BC)
②「エリート層の交換ネフェルチェバウとその妻イビの鎮墓石碑」エジプト第1中間期(2155-2134 BC)
③「授乳する女王あるいは女神の彫像」エジプト第3中間期、第25王朝-エジプト末期王朝、第26王朝(775-525 BC)
④「動物の頭部を把手にしたアンフォラ」エジプト新王国、ラーメス時代、第19王朝(1305-1185 BC)
⑤「人間の棺の箱部」エジプト第3中間期(1080-664 BC)
⑥「アミュレットのネックレス」エジプト末期王朝、第26-30王朝(664-342 BC)
⑦「呪文125のビネット、通称『死者の書』より」プトレマイオス王朝エジプト(305-30 BC)

②③④⑦‥‥©Fondation Gandur pour l' Art, Geneva, Switzerland. Photographer：Sanda Pointet
①⑤⑥‥‥©Fondation Gandur pour l' Art, Geneva, Switzerland. Photographer：André Longchamp

《イベント報告》

ゴーギャンとポン＝タヴァンの画家たち

Gauguin et l'école de Pont-Aven

フランス・ブルターニュの光

2015年4月17日（金）～5月31日（日）
主催：福井県立美術館　共催：福井テレビ

会場風景

福井県立美術館では４月17日（金）～５月31日（日）まで、「ゴーギャンとポン＝タヴァンの画家たち　― フランス・ブルターニュの光 ―」を開催しました。

本展では、19世紀末、印象派を超える新たな絵画を求め、フランスの小村ポン＝タヴァンに集い、共に活動した巨匠ゴーギャンとその仲間の画家たちの芸術を紹介しました。彼らは、後に「ポン＝タヴァン派」と呼ばれ、大きな反響を巻き起こしながら、20世紀の美術を切り開く光となりました。そしてゴーギャンは、この地で楽園のイメージに出会います。彼にとっての楽園は、南の島ではなく、このポン＝タヴァンから始まりました。

フランスのカンペール美術館、ブレスト美術館、デンマークのニイ・カールスベルグ・グリプトテク美術館等から、ゴーギャン12点を含む、エミール・ベルナール、ポール・セリュジエ、モーリス・ドニなど27作家による全74点を展観しました。

また、日本を代表するゴーギャン作品であるとともに、ゴッホとの共同生活の時期に描かれたことでも有名な《アリスカンの並木路、アルル》（東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館蔵）も特別公開されました。

展覧会では、ゴーギャンと仲間たちの歩みに沿って、『第１章　1886年：ゴーギャンの最初の滞在』『第２章　総合主義の創出』『第３章　ル・プールデュでの滞在とグループの拡大』『第４章 ブルターニュでの最後の滞在、そして最後の仲間たち』の四つの章をたどるうちに、絵画は外界の光を写すことから、人の内面世界の表現へと舵を切って行きます。

美術史が教える、「印象主義」から「総合主義」や「象徴主義」「ナビ派」へ、といった大きな転換の流れに立ち合うとともに、ゴーギャンと仲間の画家たちそれぞれの個性や才能の輝きに出会うことが、本展の見どころでした。さらに、風光明媚で知られるフランス・ブルターニュ地方を、絵画でめぐる旅として楽しむこともまた、その魅力のひとつとなりました。

会期中は、「学芸員によるギャラリートーク」「見どころ解説会」「学校鑑賞会」「美術館学芸員トークサロン」が開催されるとともに、喫茶室ニホでは特別スイーツ・メニューが提供されるなど、多様なイベントが展覧会を彩りました。GW期間ということもあり、熱心な美術ファンの皆様を中心に、貴重な展覧会を楽しんでいただきました。

学校鑑賞会

関連イベント

◎学芸員によるギャラリートーク
［日時］４月25日（土）、５月２日（土）各午前11時～　［場所］展示室にて

◎見どころ解説会
鑑賞のツボを学芸員が20分程度で分かりやすく解説
［日時］会期中の土曜、日曜、祝日　［場所］午前11時～　講堂にて

◎美術館学芸員トークサロン　展覧会ができるまで
［日時］５月16日（土）17：00～18：00　［場所］美術館喫茶室ニホにて
ソプラノとピアノによるミニコンサートとともに

◎美術館喫茶室ニホ
期間限定スイーツ「ポンタバンバン　～塩キャラメルのブランマンジェ～」を提供

◎グッズ・コーナー
ゴーギャンやフランス・ブルターニュに関連した書籍やグッズを販売。（美術館友の会）

◎同時開催
テーマ展「新収蔵品／生誕150年記念　島田墨仙と近現代日本画」

学芸員によるギャラリートーク

「ポンタバンバン
～塩キャラメルのブランマンジェ～」

ソプラノとピアノによるミニコンサート
（美術館学芸員トークサロン）

米谷清和氏に聞く 日本画家・横山操とその時代（第一回）

テーマ展「島田墨仙と近現代日本画」で展示した横山操の「網」（手前）、「川」

前回のテーマ展「島田墨仙と近現代日本画」では、横山操の「網」「川」を展示し、それに併せて愛弟子であった米谷清和氏（多摩美術大学日本画学科教授）に横山操にまつわる貴重な話をお伺いしました。

今回は横山操の人となりを紹介し、次回以降に米谷氏が画家となってからの話や、「網」「川」両作品が当館に寄贈された経緯や技法についての部分をご紹介します。

横山操

1920年新潟県西蒲原郡吉田村（現燕市）生まれ。昭和を代表する日本画家。洋画家をめざして上京し、1940年青龍社展で入選。その後徴兵されシベリア抑留に遭い1950年に帰国。同年に初の個展で「網」「川」等を出品、「炎炎桜島」で青龍賞を受賞。1962年に青龍社を脱退。1966年に多摩美術大学日本画科教授に就任、熱血指導で学生に慕われ、多くの日本画家を育てた。1971年に脳卒中で倒れ右半身不随となり左手で制作、1973年に制作途中に亡くなった。

米谷清和

1947年福井市生まれ。1972年第４回日展に「エレベータ」が初入選。1973年多摩美術大学大学院修了（修了制作「エレベータ」）。1985年山種美術館賞展優秀賞。2002年福井県立美術館にて「米谷清和展」開催。現在、日展評議員、多摩美術大学教授。

聞き手　佐々木美帆（福井県立美術館学芸員）

横山操の人となり

―米谷先生が多摩美術大学に入られたときには、横山操、加山又造と綺羅星の如くの日本画教授陣でしたが、授業はいかがでしたか。

先生がたも40代前後で元気なときですよね。僕が19歳で多摩美に入ったとき加山先生が39歳で、横山先生がその7歳上でしょ。加山先生が入る（1966年）までは、郷倉千靭とか、森田曠平とか、新井勝利とか院展系の先生が中心でした。それが全部とっかえのような形で教授が変わり、これからやっていくということもあって、活気がありましたね。今の多摩美の歴史はそこから始まった様な気がします。だから僕なんかもやられましたけど、絵はそっちのけで「こいつの才能は」とか人間論を説かれたりしました。

―横山操さんとズバズバ言い合うような指導を受けたとおっしゃいますが、具体的にはどのようでしたか？

まあ、色々ありますけど、横山先生と特に親しくなったのが大学1年生の６月の講評会でした。僕は１年生で、横山先生は３年生を持っておられた。３年生の批評会が終ったあと、並んで学校の課題とは別に描いたキャベツの絵を見せました。そしたら、横山先生が開口一番こう言うのです。

「お湯沸いているか」

「沸いてまーす！」

「持ってこーい！」

それで絵にやかんでばーっとお湯をかけて「こんなキャベツ食えるかー！描き直し」それで終わり。

それで悔しくて寝むれなくて、３日間寝ずに描き直した絵を朝８時頃、横山先生の自宅に持って行きました。そしたらお手伝いさんが、ちょうど家の前を掃除していました。

「何か御用ですか」と言うので「先生に絵を見て頂きたくて来ました。先生は、いつごろ起きてこられますか」と聞きました。「もうとっくに起きて、今アトリエにいらっしゃいますよ。もうすぐ朝食で降りて来られると思います」と家に入れてくれました。

先生は降りて来られると、徹夜明けの僕の顔を見て奥さんに「布

団敷いてやれ」って言われて、僕には「お前、寝ていないだろう。とにかく寝ろ。話はその後だ」って言って全然眠たくないのに寝かされました。でも寝られるわけなくて、寝たふりをしていると先生が 10 時頃来たのでぽっと起きました。
「おはようございます」
「起きたか。何だ」
「いやこの間の絵を直したので、見て頂きたくて、先生が学校に来るまで待ってられなくて」それで絵を見せました。
「よし、じゃ飯食べよう」と言われて、飯食べながら、
「絵はこういう気持ちで描いて欲しいね」とそれだけ。それから割と親しく呼び出されるようになりました。

—激烈な指導ですねえ。私でしたら涙で枕を濡らすばかりで、描き直す気力が出るかどうか、、、。

だから、信じられないかもしれないけど、普通の美大生に比べていろんな体験をしています。横山先生が最後、信州の方に旅立ったときも僕と 2 人だけです。その 1ヶ月後に倒れられました。倒れたとき最初に呼んだのが僕で、2 度目に倒れられたとき家族以外に最初に呼んだのも僕でした。2 度倒れたら死ぬって分かってらっしゃったから、「一部始終をお前観察して、死んだら、芸術新潮に送れ」って言われたけど、まだ大学の学生だった僕には出来なくて、僕から加山先生に電話をかけて、それで『芸術新潮』に出ている、加山先生と横山先生のエピソードが載っています[1]。そういう意味では晩年の横山操は家族以外では一番よく知っているかもしれない。

横山先生は僕について加山先生に「俺が厳しく言うから、何でもいいから褒めろ」と言っていたみたいです。ところが加山先生は男の絵は滅多に褒めない人です。女の子はどちらかというと、自分に無い所を持っている人を褒めるので、割と「ええ?」とか思うような絵を褒めたりします。男は滅多に褒めなかったのに、僕のところだけ少なくともけなしはしないのですよ。

ところが後で考えると、絵のことは全然褒められていないです。大学 1 年生のときに「この子は男の子にしてはいい絵具を使うね」とか「絵具をケチらないね」とかね。そういうことは、絵じゃないでしょ。だけど、とってつけたように「それは絵描きとして大事なことだからね、今それをやれるということは君はとってもいいことをやっているよ」みたいな感じの褒め方です。

それが 2 年生の途中で急に変わりました。
「君が上手いのは分かったよ。一所懸命なのは分かったよ。気の効いた絵をやれることも分かったよ。だけど絵がつまんない」「君、幾つ?そう、君僕より 20 歳年下なんだ。じゃあねえ、君は僕より 20 年先に生まれたら、いっぱしの絵描きになれたかもしれないけど、今だったら只の絵描きだよ。君、40 年生まれてくるのが遅かったよ。これじゃあ、今迄やってきた人たちの影響をうまく自分風にやっているだけで、新しくはない」

これを学部の 2 年生から大学院の 2 年生の途中までの 4 年間、ずっと言われ続けました。

大学院の 2 年生で日展に落ちた作品を見せたとき、初めて加山先生風の慰め方というか褒め方をしてくれました。
「額に入っているけど、どうしたの?賞を貰ったの?」
「いや、落ちました。」
「どこ出したの?」
「日展です」
「え?日展これを落とす程レベル高いかね。君、米谷君。日展やめたら?日展の人は君の絵のよさを分からないよ」

次の年に僕は「エレベーター」で初入選しました。この絵は日曜美術館で日展に新しいタイプの絵が出て来たというような紹介がされました。

4 年間、他の人は褒めてくれるけど、加山先生からずっとこれじゃあ既成の画家の域を抜けないよということを言われ続けて、もう、くやしくてこれでもか、これでもかという感じがずっとあって、だから、ちょっと違う風に育てられたのかなと自分では思いました。

—加山先生がおっしゃったことが影響して、人と違う絵を描こうとされたんですか?

いや、いろんな要素があります。大学 3 年生のときに横山先生の奨学金でヨーロッパに行ったことも大きかったです。

僕は大学 2 年生のときにバイトで屋台のおでんを引っぱっていました。油絵科の先輩が 2 人でやっていたバイトで、卒業制作で閑がないので後輩に譲ろうとなって「バイト代がいいし、ヨネちゃん頑張っているから」って譲ってくれました。

当時の相場は 8 時間で 1200〜1300 円でしたが、おでん屋のバイトは 3 時間でそれ以上の稼ぎになる割の良いものでした。

しかも僕 1 人でやっていたので、「お兄ちゃん、苦労しているんだね」ってお客さんからチップをもらうことが多かったです。1杯飲んでつまむと 1 人 300 円前後ですけど、「500 円札のおつりはいらないよ」とか、「千円札のおつりはいらないよ」とか、チップがバイト代と同じくらい毎日入って、日給 3000 円ぐらいでした。

売上げを申告すると雇い主が、「お兄ちゃん、作るのがうまいんじゃないの。お兄ちゃんになってから売上げが前より 5 割以上増えたよ」と言って、屋台を借りて後は自分でやってみないかとなって、屋台代 1日 980 円を払って、売上げは全部とるということをやり始めました。学校が終ると早めに帰って仕込んで、夜の8時くらいから終電までやって、終電が終ると国際タクシーの営業所に戻ってくる運転手さん相手に営業して、最後に洗車をして屋台を返して、それで市場に仕入れにいって、仕込んで、9時になったら学校。割と寝なくても平気なタイプだったので、1 日 3 時間ぐらいしか寝ない生活をずっとやりました。学生時代は 3 時間以上寝た事はなくて、週に 5 回くらいしか寝ませんでした。

横山先生にしょっちゅう自由ヶ丘のご自宅に呼び出されましたがそんな感じの生活で、今みたいに携帯もないし、大家さん呼び出しても留守だし、連絡がつかないでしょう。

あるとき先生に呼び出されて家にいったら、目の前に札束を 200 万円ボーンと積まれました。
「何のためにバイトしている。親の脛をかじるなら責任をもってかじれ。親はお前に勉強して欲しくて仕送っているのになんだ。お金があるかないで精一杯我慢して苦労してみろ」

その当時、三鷹あたりだと 30 坪ぐらいの家が 300 万円でした。多摩美の授業料が 7 万で、仕送りが 2 万 8 千円の時代に 200 万円です。お金はとれない、バイトはやめなきゃいけないっていうことになって、それを期に短期集中型のバイトに切り替えて、普段はバイトをしなくなりました。

僕は普通の家の子でサラリーマンの子でも美大にいくようになった走りだと思うんですよ。というのは僕の 2 年前というのは日本画の志望者そのものが少なくて、多摩美も武蔵美も 15 人の定員のところ 20 人ぐらいしか受けていないです。それが僕らのときに 80 人くらいになっています。急激なベビーブームと高度成長があったということと、親は戦争のときが青春で、だから普通の家庭であっても子どもにやりたいことをやらせてやりたいという年代なのですよね。それもあって、元々人気の油絵はもちろん、日本画の志望者も増えていった時代です。

それで、そのときのでまかせもあるけど僕も卒業したら外国に行きたいという話をしました。

そしたら 3 年生の夏休みに横山先生から電話かかってきました。「今何号描いている」というから、本当はパネルを作って紙を貼ったばかりだったのに「100 号と 120 号を描いています」と適当に言いました。

「じゃあ、それ、10 日間で仕上げろ」「何ですか」「10 日間でその絵がよかったら、その絵でお前ヨーロッパに行ってこい。お前に奨学金やる」みたいな感じで言うのです。

今紙貼ったばっかりでしょ。しかも、2 枚って言ったでしょ。だから 10 日間、全然外も出ないで描きました。そしたらまだちょっと形に成り始めたところで、ぽこっと夜中に来て「どうだ。なんだ、まだこんなところか。駄目だな、3 日後に来る」、それで 3 日後に来て「駄目だなっ」と言って、それでまた 3 日後に来て「駄目だな、まだ」、それから 2 日後に来て「しゃあないか」、という感じ。その間に僕はパスポートをとって、何処に行きたいか選んで、肝心の横山先生のオーケーを出発の 2 日前にもらいました。だから旅行鞄も買っていなければ、ガイドブックも買ってなくて、前日、先生が、「お前どうやって行くんだ」と言うから、「いやまだ何も買ってないです。旅行鞄すら買ってないです」と答えると、「おれが一緒についていってやろう」と言ってくれて、旅行鞄を買って、着替え買って、それで出かけました。だから、ガイドブックも何もなしです。

とりあえず、イギリスのインターナショナルスクールに午前中通ってちょっと英語に慣れて、午後自由時間のコースでイギリスに2週間いて、それからイタリアまで降りるコースでした。

インターナショナルスクールのクラス分けの試験を受けたら、筆記は中学校のレベルで、ヒアリングとスピーキングは小学校5年生前後で、小中どちらでも自分の希望で選びなさいと言われて、簡単な方がいいと思ったので、小学校 5 年生のコースを選びました。

そしたら、僕はちょっとヒーローになったのですよ。そこに入っている子は、俺以外は話せるけど書けない子ばかりでした。それで試験になると僕でも簡単と思う様な問題しか出ないのだけど、皆はスペルを間違えていて、僕は出来るわけですよ。そうすると、みんな僕の側にカンニングに来て、それで仲良くなれました。

午後は皆一緒に連れて歩いて、そうすると皆英語ぺらぺらで僕だけしゃべれない。皆はしゃべれるけど、書けないというコースでした。

最初に見たのは大英博物館で、その次にロンドンのナショナル・ギャラリーに行きました。モネの「睡蓮」から見始めて、ダ・ヴィンチの「岩窟の聖母」、ボッティチェリなんかも意外と迫力ないなと見ながら、だんだんつらくなっちゃって。完全に足が止まったのはピエロ・デラ・フランチェスカの「キリストの洗礼」の前で、それで美術館を後にしました。

それからのヨーロッパ旅行はパリも行っているけどルーブルも見ずに、リュクサンブール広場で自由の女神の原型になる銅像を見たり、墓地とかブローニュの森を散歩したり、とにかく絵の側に近寄れなくて美術館に行けなくなっていました。

というのは自分が持っているデッサン力とテクニック、色感、どれを見ても自分はこのレベルに一生かかってもいけるだろうかということを感じ始めて、ひょっとしたら自分には絵の才能がないのではないかと思い始めたのです。

旅行の最後の日は、一番の目的だったシスティーナの礼拝堂に行きました。今なら「地球の歩き方」とかガイドブックも色々なものがありますけど、調べもせずに朝 9 時に行ったら休館日でした。

ローマの最後の日をシスティーナ礼拝堂で過ごそうとしたのに、根底から駄目になって、気がついたら絵のあるところを探している自分にふと、気がつきました。絵が下手だと分かっても絵が好きなのだと。それで、絵を描く気持ちに戻れたのです。

システィーナ礼拝堂が休館日でなかったら、そういう気持ちに気がつかなかったかもしれない。世間的には不運かもしれないけど、僕にとっては絵に戻してくれるラッキーな休館日でした。

そういうことがあって、帰りのパリでのトランジェットの7時間は、ルーブルを駆け足で廻って、そのときにモナリザも見たし、ヴィーナスも見たし、ニケも見ました。

上手くなりたいといっても自分なりにしか上手くなれないですからね。本当のテクニシャンを目指すという気はそこで絶望に近い失望があったので憧れがなくなって、そのあと思ったのは、どんな巨匠が宗教画や物語、市井の人を描いていても、それらは現代の絵ではないということです。すごい絵だけれども、今自分が見ているものからは、違和感があります。僕も未来には生きられないし、過去は知る事が出来ても生きていない。だから自分の生きている時代と真正面に付き合ってみようと思いました。

だから誰かの真似とかではなく、自分の見た物のなかからモチーフを決めていったというのはありますね。(次号に続く)

1.『藝術新潮』「賢兄、横山操逝く」加山又造(1973 年 5 月発行)。横山のエピソードとともに、米谷が臨終間際に電話を掛けてきた様子も以下のとおり書かれている。

三月二十七日夜、卒業生のＹ君から電話があり、「横山先生が今入院なさいました。今夜がどうなるかのやまのようです」と泣くような声が響いて来た。私は体がぶるぶるふるえ乍ら、唯々車を飛ばした。

米谷清和「エレベータ」(1972年) 日展初入選作、多摩美術大学大学院修了制作

米谷清和「夏」(1981年) 第13回日展

INTERVIEW

福井県立美術館 次回の企画展案内

大永平寺展

曹洞宗の大本山永平寺は、鎌倉時代の寛元2年（1244）、開祖道元禅師により越前志比庄（現在の永平寺町）に創建された禅の修行道場です。以来770年以上の長きにわたり、道元禅師の教えと数多くの文化財を今に守り伝えてきました。

本展覧会は、永平寺に所蔵される文化財のなかから、道元禅師ゆかりの品をはじめとする、絵画・彫刻・書跡・文書など、国宝・重要文化財を含む秘蔵の品々を一挙公開し、永平寺の歴史と信仰、その美を紹介します。

狩野探幽「四季花鳥図」（秋）　永平寺蔵

会　　期　平成27年10月2日(金)～11月8日(日)
※10月13日(火)・19日(月)・26日(月)は休館日

観 覧 料　一般 1,000円(前売り・団体800円)
大・高生 700円(団体560円)　中・小生 500円(団体400円)
※前売りは一般のみ。団体は20名以上。
※障害者手帳提示者および介護者1名は半額。
※未就学児は無料。

Contact　美術館喫茶室 ニホ
open：9時～19時　closed：月曜日
tel：0776-43-0310　＊無料 Wi-Fi＊
address：
〒910-0017 福井市文京3丁目16-1
福井県立美術館　正面左手
※美術館が休館でも、月曜日以外は営業しております。

ニホでは「古代エジプト美術の世界展」にあわせてエジプト祭りを開催中！

書棚に古代ロマン漫画「王家の紋章」全巻を揃えて皆様をお待ちしております。

スペシャルメニュー「ラクダパフェセット」800円

玄米フレークにバニラとアーモンド2種のアイスを重ね、ミントのジュレで爽やかに仕上げています。てっぺんのピラミッドクッキーなどなどにエジプトのスパイスを効かせています。お庭のピラミッドオブジェを眺めながら、コーヒーか紅茶（アールグレイ）と一緒にどうぞ。

会期中はエジプト写真展も開催！

セラピスト・石川久美子氏がエジプト滞在中に撮ったスナップ写真を展示しています。古代エジプトを堪能した後は、喫茶室ニホで今のエジプトを楽しんで下さい。

「美術館だより Vol.145」訂正とお詫び

前回の「美術館だより Vol.145」で間違いがありましたので、下記のとおり訂正します。

P4　3列目下から7行目
（誤）美術教諭→（正）英語教諭

P5　3-2「結末のない話」画像の向き
（正）

読者の皆さまならびに関係各位にご迷惑をお掛けしましたことをお詫びするとともに、ここに訂正させて頂きます。

お知らせ

◎2015年7月～9月の休館日について

展示替え、館内メンテナンス等のため、次の日は休館とさせていただきますのでご了承ください。
7月1日(水)、2日(木)、21日(火)、8月3日(月)、31日(月)～9月13日(日)、25日(金)～30日(水)、10月1日(木)

貸館情報　[9/15~9/24]

9/15～9/23	「高嶋脩二大作展」（gaia rhapsody）	9/21～9/24	田部井英明個展－いろいろなものが見えてくる
9/16～9/20	キヤノンフォトクラブ（EOS）福井第13回写真展	9/22～9/24	第27回涼村社水墨画展
9/18～9/20	創立60周年記念 第56回九龍社書展	9/22～9/24	第35回北庄篆会展

美術館だより第146号　　本誌は再生紙を使用しています。

編集／発行：福井県立美術館　〒910-0017 福井市文京3丁目16-1　tel.0776-25-0452　印刷：小川印刷株式会社　発行日：平成27年7月1日　15.07.20220